# 村上春樹『カンガルー日和』

# レポート集

5 月 21 日(土)13:45～(第 11 回)13:45～「カンガルー日和」第 1 回討論
6 月 18 日(土)13:45～(第 12 回)13:45～「カンガルー日和」第 2 回討論
7 月 12 日(土)「カンガルー日和」レポート締切。後、西田読書会 HP に掲載
7 月 16 日(土)13:45～(第 13 回)13:45～「カンガルー日和」第 3 回討論

## 日常(平常)とテキスト

### ――村上春樹「カンガルー日和」を読む――

佐野　之人

### はじめに

何の変哲もない日常である。カンガルーの赤ちゃんに強い興味を持つ「彼女」と、そんな彼女を大切に思う「僕」がめでたく動物園のカンガルーの赤ちゃんを見て楽しむことができた、それだけの話である。どこにも変わったところはない。読者はこの小説の一体どこを読めばいいのか、まずは戸惑うだろう。そこにはそもそも小説とは「何か」を表している、という前提がある。あるいは小説とは「何か」を読むことであり、それを読まなければ小説を読んだことにならない、という前提である。この小説の読者はその「何か」に悩まされることになる。

それでもやはり「何か」があるだろうと考え、日常では問題にもしないような論点を切り口にしてこの小説における「何か」を探り出そうとする。例えばそうした論点の一つが「動物園の柵の外から動物を眺めるという設定にどういう意味があるか」である。もちろん通常であればこんなことは問題にならない。動物園の柵の外から動物を眺めることは当たり前だからである。もちろんこうした論点の設定に必然性があるわけではない。設定はその他にいくらでも考え得るだろう。何故「カンガルーの赤ちゃん」でなければならないのか、というのもそうした設定の一つであり得る。「我々は一月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ちゃんの誕生を知った」とあるが、それは理由にならない。彼らに与えられる情報はその他にも山のようにあり、その中で何故「カンガルーの赤ちゃん」でなければならなかったかが、改めて問われるからである（『はじめての文学』版の「彼女」のセリフには「今のところそれ（問題になること：引用者）はカンガルーの赤ちゃんだからよ」とあるが、同様にそれも理由にはならない)。こんなことは「彼女」の言う通り（「そんなことときかないで」『全作品版』、『はじめての文学版』)、通常であればもちろん問題にならない。しかし何の変哲もない

日常が描かれている小説の中に、小説における「何か」を見出そうとする読者は日常の当たり前を考えなければならなくなる。視点人物である「僕」とは区別される、語り手はそうした読者の反応を予想しているのではないだろうか。

読者の第一印象が〈何の変哲もない日常〉であったとしても、それでも読者はそれぞれの印象を持つだろう。そうしてそれは「僕」と「彼女」の関係、およびそれぞれの人物評価に集中するだろう。改訂は二度に及ぶが、重要な改訂はすべて読者の〈人物評価〉に関わるものと考えられる。まずその点を確認して置こう。

## 改訂はどのように行われているか

第一に、人物評価において作品の本質から離れた暴走を読者に起こさせないための改訂が行われているように見える。話の脈絡ではノイローゼにかかっているのは、「カンガルーの赤ちゃん」なのだが、不審に思った「僕」が「赤ん坊が（ノイローゼ：引用者）？」と聞くと、「彼女」はこれまでの話の脈絡には関係なく「まさか。母親がよ」と答える。この辺り、妊娠・出産に敏感な向きは男の無神経さを咎める所だろう。そうして彼女の心身の状態について様々な憶測を巡らせるだろう。ある者は「彼女」自身が「ノイローゼ」を患っていると思うかもしれない。そうした解釈の可能性を断つためであろうか、『全作品版』では（母親カンガルーが）「何かですごいショックを受けて」（奥の暗い部屋に赤ん坊を連れて閉じこもっている）という加筆を行っている。この加筆によって「彼女」自身がノイローゼに罹っている、という方向に解釈が突き進むことはなくなるだろう。さらに「ショック」とだけ言えば医学的なショックもあり、そうした誤解を避けるために『はじめての文学版』ではさらに「精神的ショック」というように改めている。改訂はつねに読者の反応を想定していると思われる。

こうしたカテゴリーに属する改訂として「ドラえもんのポケットって体内回帰願望なのかしら？」に関連するセリフの削除（これは『全作品版』で削除され、それが『はじめての文学版』でも踏襲されている）と、小説末の「ビールでも飲まない？」を「マレー熊を見に行かない？」に改めた点（『はじめての文学』版における改訂）を挙げることができるだろう。「体内回帰願望」はもちろんのこと、〈ビールを飲む〉ということも妊娠に関連付けて「彼女」の人物評価に関する議論になり得るだろう。改訂はそうした読者の解釈の暴走を未然に防ぐためになされたのではないだろうか。

それ以外の大きな改訂はほとんど「僕」と「彼女」の人物像をより明確にするためのものである。圧倒的に「僕」に関する加筆が多いのだが、それはほとんどの場合、「僕」がものごとを論理的・客観的・全体的に考え、「彼女」を大切に思う人柄であることを印象付けるものになっている。こうした改訂は「僕」の人物評価が、女性に無理解な〈女性の敵〉というような方向に暴走することを防止もしているだろう。対して「彼女」が「今」の関心に没頭する性格であることを「彼女」のセリフへの加筆によって印象付けている。

こうした改訂によって、「僕」と「彼女」はそれぞれの個性を持ったごくごく普通のカッ

プルとして共に「カンガルー日和」を楽しんでいる様子がこの小説では描かれることになる。そうであるとするならば、ますます一体この小説は「何」を言おうとしているのかが問題になる。男女のほのぼのとした「お日和」を描いただけの小説なのだろうか。そんなはずはない！と読者は思うだろう。

**柵の外から動物を眺めるという設定から学ぶこと**

もしかすると〈柵の外から動物を眺めるという設定〉に意味があるのかもしれない、そのように読者は考えるかもしれない。もちろんこんなことは日常では問題になりえない。しかし窮地に追い込まれた読者はこうした日常を敢えて問題にすることを思いつく。するといろいろな光が差し込んでくる。

この小説には「外から眺める」という構図が入れ子のように重なっていることが見えてくる。まずカンガルーを柵の外から「彼女」と「僕」が眺めている。さらに「彼女」を「僕」が外から眺めている。さらに「僕」が「僕」自身の内面を眺めている。最後の点については「外から眺める」とは言えないと思われるかもしれない。しかし「眺める」ということはどんな場合でも「外から」である。その場が自己の内面であったとしても眺められた自分は「自分」そのものではない。その意味ではやはり「外から眺めて」いる。語り手はこうした視点人物としての「僕」の語りをそのまま読者に語るのであるが、そのことによって今度は読者が「僕」と「彼女」と「カンガルー」を外から眺めることになる。ここには幾重にも柵が張り巡らされている。こうした構図が見えてくる。

「外から眺める」、こうした構図が意味するものは何だろうか。第一に眺める者は眺められる者自体を知ることはできない、ということである。逆に言えば、外からどのように眺められようと、眺められた者自体はそれとは関係なく、それ自体を営んでいる、ということである。これは「カンガルー」そのものについても、「彼女」そのものについても、「僕」そのものについても「僕」は知りえず、「カンガルー」も「彼女」も「僕」もそうした外からの理解とは関係なくそれ自身を営んでいる、ということである。さらにこの小説（テキスト）について読者がどのような解釈を施そうとも、そうした解釈とは関係なくテキストはそれ自身の脈絡を営んでいるということである。

第二に「外から眺める」者は自分が何をしているのかを自覚しない。すでに述べたように、「外から眺める」者は眺められた者を知ることはできないにもかかわらず、それを客観的に知り、それについての客観的な真理を語っている・あるいは語り得ると信じている。「外から眺める」とは一定の視点に立って眺めるということである。それはその立場における自分の関心を通して眺めるということである。しかしながら「外から眺める」者は、自らが語っていることが自分自身の関心の投影に過ぎないことに気付けない。もちろん少し考えればそのようなことは頭ではわかるのだが、実地に見て語る際にはそうはいかない。

「彼女」は今興味のあるものに没頭しつつ見ることを、「僕」は反対に論理的・客観的・全体的に見ることを「見る」ことだと思っている。「彼女」はカンガルーの母親に成り切っ

て様々なことを感じ、「僕」は父親カンガルーや、「ミステリアス」な（性的に怪しげな）メスのカンガルーにも目を配り、カンガルー間の関係を見ようとしている。「没頭」と「俯瞰」は「見る」ことの両極を成しており、そのことによって二人の見方はそれぞれ「彼女」らしい、「僕」らしい見方になっている。同じように読者はこの二人の関係と人物について様々な印象を持つであろうが、それはすべてその人らしい見方になっているはずである。そうして人間はどんな場合でもそのような見方しかできない。実地に「外から眺める」者はそうしたことに気付けない。

第三に「外から眺める」者はそのように自己関心に基づいてすべてを眺めながら、そのように眺めている自分自身を問題にしない。自分自身を内に眺めている場合ですらそうである。このことは「外から眺める」が原理的に抱える問題である。「なかなかうまくいかない」、「まるで思い出せない」、「僕」はそこに「人生」を見出だしながらも、今日は「明るい面」（カンガルー日和）だけを見ようとしている。そうした「自分自身」が切羽詰まった問題にはなっていない（『はじめての文学』版による）。その意味では「外から眺める」ということは本質的に他人事でしかない。

我々人間は物・生物（「カンガルー」）、他者（「彼女」）、自己（「僕」）とそれらがおいてある世界を「外から眺める」（俯瞰しつつ没頭する）ことによって、自らの関心に基づいて構成（解釈）された〈物語〉の世界に没入して生きている。ところが〈実在〉は物・生物にしても、他者にしても自己にしても世界にしても、そういう解釈とは全く関係なく、それに先立ってそれ自身を営んでいる。しかしそうであるからこそ我々には、自らの〈物語〉の世界が破れて〈実在〉に触れる機縁・瞬間というものがあり得る。それが〈体験〉である。〈実在〉ないし〈体験〉は言語以前、したがって言語道断であり、一定の筋というものを持たない、どこまでも不可解なものである。我々はこうした〈体験〉に言葉を与えることで〈物語〉を創造する。そうしないと生きていくことはできない。そうしてこの物語が物語であることが意識されなくなったもの、それが所謂〈現実〉に他ならない。

我々は同じ『カンガルー日和』に収められた「4 月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子に出会うことについて」においてすでにそうした〈現実〉〈体験〉〈物語〉の関係を経験し、「タクシーに乗った吸血鬼」では所謂〈実在〉とは〈信念〉にほかならず、そのことの明確な自覚が真の〈実在〉との新たなかかわりを開くことを経験した。何の変哲もない日常しか描かれていない「カンガルー日和」で読者は一体どのような経験をするのだろうか。

## カンガルー日和？

見ることが本質的に「外から眺める」ことであることを経験した読者は「カンガルー日和」という言葉に注目するかもしれない。そもそもカンガルーに日和などはない。日和は徹底して人間の都合である。雨が降っていない、地面がぬかるんでいない、いやな風が吹いていない、虫歯が痛まない、役所に行く必要がない、彼らはこうして「日和」を選んでいるのだが、これらはすべて人間の都合である。カンガルーには何の関係もない。実際「そして一ヵ月間

カンガルーの赤ん坊を見物するに相応しい朝の到来を待ち続けていたのである」とあるように、すべては彼らが「見物」するための都合である。(『はじめての文学』版では「我々としてはできるだけ正しいかたちでカンガルーの赤ん坊を見たかった。そしてできることなら、ささやかな祝福を与えてやりたかった」という加筆がある。この場合でも主目的はやはりカンガルーの赤ん坊の見物である。「祝福」はあくまでも副次的な目的と考えられる。) また『はじめての文学』版では「明るい側面だけを見る」ことが「カンガルー日和」の過ごし方のように書かれているが、それも人間の都合である。

カンガルーはおそらく自分がカンガルーであることも自覚せずにその生死を生死している。只管生き、死ぬ。そこには取り立てて「日和」などはない。逆に言えば毎日が日和である。禅語（碧巌録）に「日々是好日」という語が見える。好日とは日和のことである。しかしこれは人間の都合によって選ばれた好日ではない。雨が降ろうが、病になろうが、そうして死ぬことになろうが、すべてが好日だということである。こうなるとこの「好」は好悪を超えた「好」であることが分かる。分別を交えずに只管生死する、それがカンガルーの生き方である。何が起ころうとも特別なことは何もない、その意味では「日々是好日」は「平常無事」と同趣旨である。こちらは臨済録に見える語である。この無事は所謂平穏無事のことではない。雨が降ろうが、病になろうが、死ぬことになろうがすべてはアタリマエ(「平常」)であり、特別な「事」は何も「無」いということである。

こうした生き方は人間にはできない。平常の中に好悪（都合）を見出さずにはおれないのが人間であるが、平常はそんなものとは関係なく、その道を歩んでいる。そうだとすれば、カンガルーの「日々是好日」の生き方はカンガルーに留まらない。我々人間がすでに我々の自覚とは関係なくそうした生を「日常（平常)」として歩んでいるということである。「平常心是道」という語も臨済録に見える語であるが、これは「平常」を「心」とするところに開かれるのが道（仏道）だということである。

我々人間は「外から眺める」ことしかできない。物・生物（「カンガルー」）にしても、他者（「彼女」）にしても、自分自身（「僕」）にしても、それらが関わり合う場としての世界にしてもそうである。しかし、いやそうであるからこそ、物・生物にしても、他者にしても、自分自身にしても、「外から眺める」ことに先立ってすでにそれ自体の在り方を「日常（平常)」という仕方ですでに営んでいるはずなのである。こうした次元に我々読者はこの小説を読むことで改めて目覚めることになる。これもこの小説における読者の経験である。

## テキストとは？

読者はカンガルーと「彼女」と「僕」とをテキストを通じて「外から眺めて」いるのだが、読者とテキストの関係はどのようになっているのであろうか。まずテキストとはそこにおいて〈読む〉ということが成り立つ場であると考えられる。すなわちそれは語り手が読者に語る場であり、読者が語り手の語りを聞く場である。そこで「何が」語られ「何が」聞かれているのか、それは分からない。そこは言語化以前の体験の場である。先に我々の所謂〈日

常〉の根柢に我々の好悪を超えた〈平常〉の次元が開かれたが、それは所謂〈現実〉の根柢の言語化以前の領域である。テキストも同様に言語化以前の領域であるが、こちらは〈物語〉の根柢である。しかしすでに「4 月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子に出会うことについて」で経験したように、〈現実〉と〈物語〉は裁然と分かたれるものではなく、最深の〈実在〉の二つの異なれる場ないしそこにおける表現である。

我々はこうした言語化以前の〈テキスト〉（体験）を「外から眺める」（反省する）ことで〈テキスト〉の呼び声にぴったりとした言葉を与えようとする。時に視点人物に「没入」し、時に全体を「俯瞰」しつつ、時には〈テキスト〉そのものに批判的な目を向けながら〈テキスト〉を「外から眺める」。こうして初めて〈テキスト〉の内容が解釈され、意識にもたらされる。それはすでに読者の視点からの解釈であるが、こうした解釈の営みなしに〈テキスト〉はその言語化以前の姿（どこまでも分からない姿）を意識（反省）に現わすこともない。

**この小説における作者の「実験」**

村上春樹は『村上春樹全作品 1979～1989❺短編集 II』（講談社 1991.1）の「自作を語る」の中で「内容以上に形式」に関心を向けており、「いろんな手法を使って」「いろんな実験」をした、と述べている。それは小説の形式に関するどのような実験であったのだろうか。「4 月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子に出会うことについて」では〈現実〉と〈物語〉を重ね合わせて、現実と物語は裁然と分かたれるという前提をもって小説を読み始める読者を戸惑わせているように感じられる。また「タクシーに乗った吸血鬼」ではわざわざテキストを両様に解釈できるように描き、解釈は深浅の差はあれただ一つしかないという前提のもとに、一つの解釈を引き出して満足している読者を戸惑わせているように感じられる。どちらにも言えることはある「形式」を置いてみて、これを読者がどのように受け取るだろうか、ということを仮想的に「実験」している、ということである。それぞれの改訂もそうした観点から施されているように思われる。そうして読者を最終的に〈文学体験〉すなわち〈変容〉に導こうとしている、そのように感じられるのである。この小説（「カンガルー日和」）ではどのような形式に関する実験が行われているのであろうか。

ここでもやはりある「形式」を置いてみることで、読者がどのような反応を示すかを仮想的に「実験」しつつ、読者を〈変容〉に導こうとしているように思われる。詳しく見て行こう。

おそらく読者はこの小説を読むにあたって、これが文学作品であるからには「何か」あるはずだ、という前提をもって読み始めるだろう。確かに人生観の変容をもたらすような何らかの体験を導かないものは〈文学〉とは言えない。謎解きに終始し、謎が解けてすべてが明らかにすることで足れりとするものは〈娯楽〉であって〈文学〉ではない。娯楽はそれを味わうものを喜ばすことを目的としており、それを享受する者は自分の人生観を一歩も出ることはない。これに対し芸術作品としての文学は読書体験を通じて読者自身の変容を迫り、実際に変容を導くものでなければならない。そうはいっても変容が起こるかどうかは完全

に読者の側の問題だから、芸術か娯楽かの区別は全く読者に依存しているということも明らかである。以上の点は動くまい。

しかしそうした前提をもってこの小説を読み始めた読者は、次第に訝しく思い、この小説を読み終えた時分には、それは戸惑いに転ずるだろう。この小説には読むべき内容が何も無いからである。こうした「無」に直面し、読者は驚愕しうろたえるだろう。そうして何らかの切り口を懸命に探すであろう。しかし改訂ではそうした切り口を突破口とした解釈の暴走を念入りに封じてある。そこに残るのはありきたりの個性豊かな男女の「カンガルー日和」（何の変哲もない日常）でしかない。どうにもならない。おそらく「実験」はこうした読者の窮地を想定していたに違いない。

こうした窮地はそもそも読者が読み始めるに際して、この小説が文学作品であるという前提のもとに、そこに特別な「何か」があると想定していたからである。そうなると、これは文学作品、娯楽作品といった制度に関する問題になる。我々はつねに一定の制度の下に生き、そこで鑑賞し、思考し判断している、ということである。マルセル・デュシャンの「泉」やジョン・ケージの「4 分 33 秒」はそうした我々の前提を自覚させる効果を持っていた。芸術作品が提示されるべき場に、前者は日常の便器が、後者では「無(音)」が提示されたのである。「カンガルー日和」では文学作品であるべき場に何の変哲もない日常が描かれることによって、読者は一種の「無」を体験すると共に、そうした体験を導いた我々の側の前提を自覚することになる。しかしそれだけのことであれば単に二番煎じ（三番煎じ）に過ぎない。この「実験」はもう少し先を目論んでいたのではないか。

上掲の臨済録には「所以に古人云く（いわく）、平常心是道と。大徳、什麼物（なにもの）をか覓（もと）めん。現今目前聴法無依の道人、歴歴地に分明にして、未だ曽（か）つて欠少（かんしょう）せず（それで、古人も言っている、「当たり前の心が道である」と。修行者よ、何を探すのだ。現在、わしの目の前で、説法を聴き入っている、なんの寄りかかりをも持たぬ修行者は、ありありとはっきりとしていて、一度だって何かが欠けたことはない)」とある。これによれば修行者は道や真理を求めて特別なものを求めてはならないのである。そんなことをすればもともと欠けたこともなく、欠けようもない自分を、わざわざ欠けたものにし、その特別なものに依りかかってしまうからである。文学作品に日常と異なる「何か」を求める姿勢がまさにそうしたものである。

しかし、ならば特別なものを求めなければよいのだな、とすればそれが「特別なもの」となってしまうであろう。「平常心是道」はこちら側の心持でどうとなるものではないのである。それと同様に文学作品に対するこちら側の前提に気が付いたとしても、人間が道や真理を求めて「何か」を求めることを自ら止めることはできない。とはいえ目の前にあるテキストには何も無い。こうした窮地に行き詰まることを通じて、「何か」を外に求めてこれを〈待つ〉のでなく、〈ただ待つ〉。窮することを通じて〈ただ待つ〉ということが成就した時にはすでにこの小説を読む手掛かりが〈到来〉している。これがこの小説で言えば、例えば〈柵の外から動物をながめる〉という「形式」である。こうした「形式」の〈到来〉に目覚める

ことで、読者はテキストの呼び声に応えつつ思索を駆動することができるのである。

かくして読者は一定の小説の解釈に到達することができるのだが、それはその時点での読者の視点における解釈でしかない。もちろんそれは否定的にのみ語られるべきものではなく、その時点でのその人にしかできない解釈である。しかしそれが〈テキスト〉を「外から眺め」た外観であることに変わりはない。〈テキスト〉はあくまで言語化以前の出来事である。

たしかに小説（テキスト）に特別な「何か」を求めて、これに依存するのは「平常心」とは言えない。カンガルーに「カンガルー日和」などないのと同様に、日々（平常）に特別な日和（好日）などない。しかし人間は日常に特別な「何か」(「カンガルー日和」) を求めずには生きて行かれない。何も求めないでは意識すら保てないであろう。しかし「何か」を求めて待つ道が閉ざされ、どうにもならなくなった時、〈ただ待つ〉しかなくなる。それが成就した時に「カンガルー日和」の「到来」を「一瞬のうちに確認する」ことになるのであろう。

「何か」を求めることがなければ人間は意識すら保つことはできない。「この一ヵ月のあいだいったい何をしていたのか、僕にはまるで思い出せない。いろんなことをやったような気もするし、何もしなかったような気もする。月末になって新聞の集金人がやってくるまで、一ヵ月が過ぎてしまったことにさえ僕は気づかなかった」。これに対し「我々」は「カンガルー日和」を求め、これを待った。だから「僕」はそれに関することはよく覚えている。「ある朝には雨が降っていた。次の朝にもやはりやはり雨は降っていた。その次の朝には地面がぬかるんでいたし、それに続く二日間は嫌な風が吹いていた。ある朝には彼女の虫歯が痛み、ある朝には僕が区役所に行かねばならなかった」。ほぼ毎朝の、通常であれば（待つことがなければ）決して思い出すはずもないことを鮮明に覚えている。しかし「相応しい朝の到来（「カンガルー日和」)」を待つと、「そんな朝はなかなかやってこな」いのである。

こちら側からの手立てがなくなり、いよいよ〈ただ待つ〉ほかなくなる刹那、突如として「カンガルー日和」は到来する。「しかし何はともあれ、カンガルーを見るための朝はやってきた。我々は六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに確認した」。

同様に読者はこの小説に「カンガルー日和」を求め、これを〈待った〉が、その道が閉ざされ〈ただ待つ〉ほかなくなった刹那、突如として「カンガルー日和」が到来したのである。そうであるとするならば、短編集の標題に選ばれた「カンガルー日和」とは読書経験におけるインスピレーションの象徴なのかもしれない。

以上の考察によれば、小説「カンガルー日和」における「実験」とは、まったく「形式」に関するものである。まず「何の変哲もない日常」を置いてみる。そこでどのように読者が反応するかを仮想的に「実験」してみる。相応しくない結果が出ないように予防措置を施しておく。どうにもならなくなったところで読者が如何なる体験をするか、それを仮想的に「実験」したのが「カンガルー日和」なのではないか。

# 「カンガルー日和」の感想

## カンガルー日和は何故カンガルーなのか

## T.T.

この小説は、若い男女のカップル（同棲中、既婚かどうかは不明）が、カンガルーの赤ん坊を見物する目的で平日の昼間に動物園に出かける話です。
と、何気なく「若い男女」としたものの、この二人の年齢について殆ど言及がないことに気付きました。彼らを若年者と思わない読者はいない気がしますが、何故だろうと改めて考えてみますと、
① 基本的に子ども向けである動物園という場所に、特に気負いなく出かけられる年齢
② 「彼女」の言動が幼稚
といったことが理由として挙げられそうです。
正直のところ、一丁前に同棲するような年齢に不釣り合いな幼稚さの女性と、それを女の子だから仕方ないとスルーする男性、（よくあるカップルなのかもしれませんが）どうも好きになれません。しかし読書会はとても面白かったですので、その面白さを損なわないよう以下の感想文ではなるべくこのカップルへの嫌悪感に引き摺られないようにしたいです。

読書会で「なぜカンガルーなのか（パンダでもコアラでもなく）」という問いかけがあり、それに対して「カンガルーケア」「カンガルーコート」という言葉があるという指摘は、大変興味深いものでした。前者は「母子密着」、後者は「不規則に跳ぶ／デタラメに飛躍する」という、ともにカンガルーにまつわるイメージの核であり、この小説の通奏低音でもあると思います。

まず「母子密着」についてですが、「彼女」の赤ちゃんカンガルーに関するこだわりの強さから、これがテーマなのかなあ、何か母子関係にトラウマでもあったのかなとか最初は考えていました。
しかし、読書会で村上先生より看護学生の議論をご紹介いただき、目から鱗が落ちた気がしました。「彼女」の不安の正体＝将来母親となるべき自分に関する不安や母性に纏わる両面感情、という読みは「あり」だと気づかされました。（もちろん、そうだと小説の中で明示されているわけではないので、読みの１つに過ぎないのでしょうが。）「彼女」が自分の不安の正体をはっきりと自覚しておらず、それが抑圧された感情の複合体となって地雷化しているとしたら、当初私にはメンヘラとしか思えなかった電車内での「彼女」の発言―――突飛でとりとめがない不安の表明―――も、どこかつながっているもののように思えてきました。「僕」もそれに何となく勘付いており、それで「女の子というのは実にいろんな可能性を思いつくものだ」（＝男には無理だけど）と思ったのかもしれません。

読書会で私は、男と女のカップルでないと物語が成り立たないということもないのでは、と申し上げました。そのことを再考してみたのですが、ホモセクシャルだとどうもそのことが小説の中でフォーカスされてしまいそうで、やっぱり男女の組み合わせがベストかなと考え直しました。申し訳ありません。しかしながら、母性をヘテロセクシャル女性の専売特許とするのは多分偏見が入っていると思いますし、その意味では「男男」「女女」の組み合わせもあっていいのでは、とまだ思っています。

「彼女」と「僕」は、念願叶って仔カンガルーが母カンガルーの育児嚢に収まっているところを見ることが出来、動物園来訪の目的を達成します。それだけなら心温まる物語なのですが、カンガルーのイメージのもう一つの側面として「不規則に跳ぶ／デタラメに飛躍する」があり、小説の中にも何か穏やかでないイレギュラーが散りばめられているように思います。
一つ目として「彼女」の発想や言葉に飛躍が多く、デタラメなカンガルー跳躍を思わせます。これは彼女の愛すべき個性かもしれませんが、コミュニケーションを困難にするものであり、実際「僕」は彼女との会話の継続を途中で諦めています。
二つ目は、カンガルー一家のイレギュラーです。オス 1 匹メス 2 匹の非対称性は（カンガルーはハーレムを作る習性があるらしいので当然な気もしますが)、不安定な印象をもたらします。仲良く揃ってピョンピョンしているわけではなく、父カンガルーは異様に動きがなく心ここにあらずといった様子で、跳ね回る仔カンガルーと対照的です。動物の群れとして特におかしなところはないのですが、仔カンガルーの誕生を祝福しようというカップルの目線を辿ると、人間の家族を投影してしまうのか何となく不穏さが漂います。

「父親カンガルーはまだ餌箱の中に失われた音符を捜し求めていた。」この短い文章で、生気のない囚われの動物の悲哀を表現しているだけでなく、読み手（少なくとも私）を何とも居心地悪くさせるところはすごいと感じました。その次の文章で「母親カンガルーと赤ん坊カンガルーは一体となって時の流れに体を休め」とあります。満たされない父は別世界を求め、母子は一体となりひとときの安らぎを得る。この構図どこかで見たような・・・というところから、柵の内外が逆転し、人間もまた柵の中の囚われの身であることが暗示されることが、この居心地悪さの正体なんだろうか、と考えたりしました。パステルカラーの一見ポップな物語に重層構造を仕込み、表層に入れた罅割れから不穏さを匂わせるところが、これまで読書会で取り上げていただいた村上春樹小説の共通点であるように思います。

# 無題

## 村上春樹「カンガルー日和」

田中　克典

### 一　はじめに

「私たちは、誰一人としてこの世に生まれることを志願していたわけではありません。気がついたら生まれていたのです。」…これは、新聞の人生相談の回答者による相談者への回答文の一部である。確かに、私たちが、この世に生まれてくる経過はその通りだ。ところが、そのようにして生を受けた男女がその後、何らかのきっかけから出会い、時としてそれが生活共同体へと発展する場合がある。そして、そのような二人の関係が円滑に進行するポイントとして『相手の気持ちをどれだけ理解できるか』などということがよくいわれる。相手の気持ちをよく理解する、とはどういうことなのか？わかったようで分からない。『カンガルー日和』は、このことを問いかけた作品ではないか？

### 二　物語の流れ

作品の登場人物は、猫と一緒に暮らす僕と彼女。今、平日の月曜日の動物園のカンガルーの柵の前に来ている。きっかけは一か月前の新聞地方版でカンガルーの赤ん坊誕生を知ったこと。なんとしてもそれを見たいと思ったのは彼女、しかし、僕には彼女の真意はわからない。それでも僕は彼女が念願を果たせるようその環境づくりに奔走する。まずは、二人にとってカンガルーの赤ちゃんを見る最良のコンディションの日程、カンガルー日和の到来を待つ。そのためにひたすら一か月も待ったのだ。

いよいよ二人で動物園に向かう。電車の中では彼女はカンガルーの赤ちゃんへの不安を口にする。僕は彼女の不安を和らげようとするが、彼女の真意（なぜ、カンガルーの赤ちゃんをみたいのか？）がわからないので、満足な対応ができない。なんとか彼女の真意をつかもうと彼女に問いかけるが、彼女の回答は僕には理解できず、彼女との議論に勝てる見通しもないのであきらめる。

いよいよ僕と彼女は動物園に到着し、カンガルーの赤ちゃんと対面する。ただ、この頃から僕と彼女の間には微妙なズレが生じ始める。彼女は、ひたすらカンガルーの赤ちゃんを見る。彼女がこれほどまでにカンガルーの赤ちゃんに執着する理由はわかりようがない。それよりも、僕にとってはこの赤ちゃんカンガルーをとりまく大人のカンガルーの状況が気にかかる。二匹いる雌カンガルーと赤ちゃんカンガルーとの関係を彼女に質問してもうわの空のような返事しか返って来ない。にもかかわらず彼女の方は、カンガルーに関する質問を僕に浴びせてくる。僕は、彼女の機嫌を損なわないように、にわか仕込みの知識で一生懸命応対する。彼女のおやつ、昼食の心配もする。なぜか？彼女に機嫌よく時間を過ごしてほし

いから。カンガルーの赤ちゃんが母親（と思われる）カンガルーのお腹の袋に入ったのを見届けて彼女も一つの満足を得た様子。彼女のカンガルーの赤ちゃんへの思いその理由は僕には未だわからないが、それでも彼女の「ねえ、ビールでも飲まない。」の一言で、僕は「久しぶりに暑い一日になりそう」なこの日をカンガルー日和として祝うことができたのだ。

## 三　理解するということ

冒頭の疑問に戻ろう。僕と彼女は、お互いを理解し得たのか？

僕には、彼女がカンガルーの赤ちゃんを見ることに執着した「理由」は未だに理解できていない。しかし、僕にとって大切なことは、その「理由」を理解する事に執着することではなく、彼女にとってこの日（動物園に来た日）をカンガルー日和にするためには僕がどうすればいいかを「理解」し、その僕の「理解」が彼女に伝わることだったのだ。その結実が、彼女の「ねえ、ビールでも飲まない。」の一言だったのだ。

これは、巷間言われている「理解しあう」ということとは少しずれるのかもしれないが、僕と彼女にとってはこれで十分だったのだ。

この物語の僕と彼女の関係は明確には書かれていないが、夫婦もしくはそれに近似する関係であろうと思われる。作者は、このような男女が生きていくということを、二人の日常生活の中で起こるなにげない出来事への双方のアプローチとそのことに関するお互いへの視線（理解）を題材として描いているのではないか。

## 四　時代背景の変遷と作品の変遷

ここで、もう一つ考えさせられたのが、この作品の改定作業である。作者は、初出『トレフル』版（１９８１年１０月)、『村上春樹全作品』版（１９９１年1月）そして『はじめての文学』版（２００６年１２月）を書いている。今回のレポートは、初出『トレフル』版に基づいて作成したものである。私が注目したのは、これと、『はじめての文学』版との関係で、以下の記述である。

（1）僕が彼女に、カンガルーの赤ちゃんを問題にする理由を尋ねたことへの回答

トレフル版　「カンガルーの赤ちゃんだからよ」

「はじめての文学」版　「そんなことときかないで。今のところそれはカンガルーの赤ちゃんだからよ。大事なのは今のところということなの」

（2）最後の彼女の言葉

トレフル版　「ねえ、ビールでも飲まない？」

「はじめての文学」版　「ねえ、マレ―熊を見にいかない？」

私には、彼女に関して、「初めての文学版」の方では明らかに精神的な余裕が失われているように感じられた。「大事なのは今のところということなの」という言葉にはいら立ちに似たものを感じざるを得ない。

ここには、時代背景が反映されているのではないか。トレフル版が構想されたと思われる

１９７０年代終わりから１９８０年代初めは、学生運動は退潮期で、高度経済成長は一段落していたが一定の物質的豊かさが増す中で、物質的豊かさから心の豊かさやゆとりある生活に重きが置かれ始めた時期だった。僕と彼女にも心の余裕があった時期が作品の背景とされていたのではないか。

他方、「はじめての文学」版が構想されたと思われる１９９０年後半から２０００年代初めはバブルが崩壊し、明日への不安が増していく時代に突入し、年間の自殺者が全国で３万人を超えていった時代だった。僕と彼女にも心の余裕がなくなってきたのではないか。

ただ、いずれの版でも、上記の彼女の言葉に対する僕の対応は同じである。そこには、どんな状況でも彼女とカンガルー日和を祝いたいという僕の想いが込められているのではないか。そして、そこには、作者のそれぞれの時代に生きていく若者たちへのメッセージが込められているのではないか。だからこそ、作者は、ほぼ１０年サイクルでこの物語を発展させていったのではないだろうか。

ただ、「はじめての文学」版では、まだ、僕はカンガルー日和万歳！とはなっていない。それはマレ―熊を見てのお楽しみ、のように感じられた。

## ミステリアスだと思うとき

**大藤 渉**

「ミステリアスな雌カンガルー」という言葉が小説の末尾に登場する。なぜ、その雌カンガルーは「ミステリアス」と形容されたのだろうか。「なぜなら、」と小説をもとに答えたくなる。しかし、その答えこそが、〈私〉のなかにある前提を含意しているのではないだろうか。雌カンガルーはミステリアスだと思うとき、ミステリアスではないあり方をどうにもイメージしている。

「カンガルー日和」を読んでいると、何でもない普通の日常を描いているように思える。カンガルーの赤ん坊を見に行くことを楽しみにする僕と彼女、動物園にいる４匹のカンガルー、カンガルーを見ながらの会話、どの場面もありふれた日常である。しかし、そこに怪しさを感じてしまう。どうしてカンガルーの赤ん坊にそこまで執着するのか、なぜ父親・母親・赤ん坊

と合わせてもう１匹雌カンガルーがいるのか、僕の断言しがちな口調と彼女の願望あふれる発言からなる会話は何を示唆しているのか。

普通の日常だと意識したとき、その場面をミステリアスだと思い、疑問をもってしまう。ひとつミステリアスだと思ってしまうと、普段の生活では全く目に留まらないことも、謎が隠されているように思ってしまう。この言葉は何を意味しているのか、なぜこの言葉で表現したのか、そこで表現されているものは何なのか。

ミステリアスだと思わせるのは、言葉のみならず、その言葉を生じさせる何かであるように思う。例えば、父親カンガルーの顔は、「才能が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじっと眺めている」と表現される。あるいは、父親カンガルーの餌箱を見る振る舞いは、「父親カンガルーは餌箱の中に失われた音符を探し求めていた」と表現される。もちろん、父親カンガルーの顔や振る舞いとそれを表現する言葉は全く異なる。しかし、言葉をもって表現させる何かが言葉によって表現される。そして、その言葉は表現される何かを含み込みながら、受け手へと表現する。だからこそ、受け手は何が表現されているのか、疑問を抱かざるをえない。

母親ではないとみなされる雌カンガルーは動物園の柵の内にいるだけで、「ミステリアスな雌カンガルー」と表現される。草原に生息していれば、「野生のカンガルー」と言われたかもしれない。動物園から脱走したならば、「お騒がせカンガルー」と報道されたかもしれない。しかし、この動物園にいる雌カンガルーは「ミステリアスな雌カンガルー」と表現され、「母親じゃない方のカンガルーはいったいなんだ？」と問われる存在になる。

ミステリアスだと思うとき、余分なものがある。父親、母親、赤ん坊の３匹ではなく、４匹のカンガルーが同じ柵の中にいることによって、その余分な存在は問われるものとなる。だが、確かにそこに存在している。何かを普通だと意識するとき、ひとつ余分なものが生じてしまう。ミステリアスだと思うとき、何か余分なものがある。この余分なものをどのように捉えるか。あるいは、余分なものに気づくときはどのような場合か。小説として読むとき、なぜそこに書かれている普通の日常なるものを不可思議に思い、日々を過ごすときには余分なものに気づけないのか。ミステリアスさを含み込みながら、何気ない日常として、生きている。

# 「カンガルー日和」試論

村上　林造

村上春樹「カンガルー日和」には三つのバージョンがある。初出は「トレフル」(1981.10)版であり、次が『村上春樹全作品 1979-1989』❺（1991.1 講談社）版、最も新しい版は『はじめての文学』版（2006.12　文芸春秋)である。本稿では、最新の『はじめての文学』版を用いる。

## 1、「カンガルー日和」について
## ――カンガルーの赤ん坊を見る「正しいかたち」とは何か？――

語り手僕は、動物園行きの目的について、「我々の目あてはもちろんカンガルーの赤ん坊である。それ以外に見るべき何があるだろう？」とあたかもそれが自明のことのように語るのだが、なぜ二人にとって「カンガルーの赤ん坊」を見に行くことがそれほど自明なのだろうか。僕は、それに先立つ経緯を次のように語っている。

> 我々はひと月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った。そして一ヵ月間カンガルーの赤ん坊を見物するのにふさわしい朝がやってくるのをじっとしんぼう強く待ちつづけていた。せっかくカンガルーの赤ん坊を見に行くのだから、我々としてはできるだけ正しいかたちでカンガルーの赤ん坊を見たかった。そしてできることなら、ささやかな祝福を与えてやりたかった。（傍線は村上による。以下同じ）

直接的な理由は二人が「ひと月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った」ことなのだが、その後、二人は「カンガルーの赤ん坊を見物するのにふさわしい」日＝「できるだけ正しいかたちでカンガルーの赤ん坊を見」ることが出来る日（「カンガルー日和」）を待ち続ける。僕と彼女にとってそれは極めて当然であるようなロぶりなのだが、これらが一体どういうことを意味するのか、読者にはにわかに理解できないところである。ただ、「できることなら、ささやかな祝福を与えてやりたかった」と言っていることからすれば、二人にとって「カンガルーの赤ん坊を見物する」とは、カンガルーの赤ん坊に「祝福を与え」やることも一つの目的であるらしいことが想像されるのである。

だが、「カンガルー日和」はなかなかやってこない。「雨が降っていた」り、「地面がぬかるんでいた」り、「いやな風が吹いていた」り、「彼女の虫歯が痛」んだり、「僕が…役所に行かなくてはならなかった」りする日は「カンガルー日和」ではないらしい。そのことについて、僕は「なかなかうまくいかない。あまり大きなことは言いたくないけれど、でもあえ

て言わせてもらえば、そういうのが人生なのだ」(注1)と言う。僕と彼女にとって、「カンガルーの赤ん坊」を見るのに「ふさわしい」日に、それを「正しいかたちで」見ること（「カンガルーの赤ん坊」に「祝福を与えてや」ること）は非常に重要であり、それが妨げられるところに「人生」の不都合さがあるとさえ考えられているのである。(注2)

それほど重い意味をもつ「カンガルー日和」であるだけに、「一ヶ月が過ぎ」、「カンガルーを見るための朝」が来た時、二人は「それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに認識し確認」する。そして、「会社は休むことにした。なにしろそれは一ヵ月ぶりのカンガルー日和なのだから」という。「正しいかたちでカンガルーの赤ん坊を見」る（カンガルーの赤ん坊に祝福を与える）のに「ふさわしい」日のためには、会社は休んでもかまわないというのである。二人は、それほどまでに自分達の振舞い方における「正しいかたち」を重視しているのだが、会社に行くより、「正しいかたちでカンガルーの赤ん坊を見」る（方を重視する生き方とはどういう生き方なのであろうか。そこでは、「カンガルーの赤ん坊を見」る上での「正しいかたち」とはどういう「かたち」なのか、そのことと「カンガルーの赤ん坊に祝福を与える」ことがどうかかわってくるのか、改めて問題になろう。

## 2、カンガルーの赤ん坊についての二人の会話
## ――彼女の「心配」「願望」と僕の「親切心」――

動物園に行く電車の中で、彼女はカンガルーの赤ん坊が「ちゃんと生きているか」どうか、「病気をしてどこかに入院」していないか、またカンガルーの母親が「何かですごい精神的ショックを受けて、奥の暗い部屋に赤ん坊を連れてひっそりと閉じこもって」いないか等々の心配に襲われる。彼女はカンガルーの母子を擬人化し、彼らに深く感情移入する一方、その心身の健康状態に対してきわめて悲観的なのである。それに対して、僕は「生きてると思うよ。だって死んだっていう記事が新聞に出ないもの。死んだら死んだっていう記事が出るはずだよ」と答えて、彼女の心配を和らげようとする。また、母親カンガルーの状態についても、僕は、「精神的ショックだって。カンガルーがどんな精神的ショックを受けるんだろう？」と、そもそもカンガルーの擬人化自体に対しても自覚的かつ抑制的なのである。カンガルーの母子に心情的に深く同化し心配する彼女に対し、カンガルーについて合理的な態度で受け止め、むしろカンガルーよりも彼女のほうに寄り添ってその心配を軽減しようと

---

1『村上春樹全作品』（1991.1 講談社）版で「そう、それが人生なのだ」というフレーズが追加され、ここに引用した形に訂正の上、『はじめての文学』版（2006.12　文芸春秋)に引き継がれる。

2 「カンガルー日和」がどういう意味なのか。例えば佐野正俊氏は、「カンガルー日和」とは、「具体的な規準を持たない極めて観念的なもの」で、「『僕』は自らにとって不本意な『動物園』行を、自分に納得させる（〈合理化〉する）ために」（7 頁）持ち込んだものであるとして、僕にとっての自己隠蔽の道具としか見ない。（「村上春樹『カンガルー日和』の教材研究のために――『カンガルー日和』という〈戦略〉」（「日本文学」2000 年 8 月）「カンガルー日和」の意味をどう考えるかは作品解釈の上で重要なポイントであろう。

する僕の姿勢の違いが鮮明なのである。

だがこの後、彼女の心配は収まるどころかより一層エスカレートしていく。

「私ね、なんだかこの機会を逃すと二度と永遠にカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ、宿命みたいに」

「そんなものかな」

「だってあなた、これまでにカンガルーの赤ちゃんを見たことある？」

「いや、ないな」

「これから先、見るだろうって自信ある？」

「どうだろう。わからないね」

「だから私は真剣に心配してるのよ」

「でもね」と僕は抗議した。「たしかに君の言うとおりかもしれないけれど、僕はキリンのお産だって見たことないし、鯨が泳いでいるところだって見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ちゃんだけがいま問題になるのだろう」

「そんなことときかないで。今のところそれはカンガルーの赤ちゃんだからよ。大事なのは今のところということなの」と彼女は言った。

僕はあきらめて新聞を眺める。そんなものなのかな。

カンガルーの赤ん坊に対する彼女の心配は一層真剣で強固なものになっていくのだが、「なんだかこの機会を逃すと二度と永遠にカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がする」という心配はどこまでも気分的なものであり、それがどこから来るのか、その原因は何なのか、僕は彼女から納得のいく説明を聞くことが出来ない。彼女の強い心配の理由や内実は、僕や読者に分からないだけでなく、おそらく彼女自身にも分からないのであろう。そのことは、「そんなことときかないで。今のところそれはカンガルーの赤ちゃんだからよ。大事なのは今のところということなの」という言葉が示しているであろう。その心配の真剣さは、彼女の心の底に何か強迫的な不安が潜んでいることを感じさせるが、僕はそれを強いて追求しようとしないし、彼女を強引に説得したり論破したりしようともしない。むしろ、彼女の主張に対して、「そんなものなのかな」と思い、「あきらめて新聞を眺める」僕は、どこまでも彼女の思いを受容しようとする姿勢において一貫している。気分的な心配を強調する彼女と、その心配を受け止めていこうとする僕の態度の違いは鮮明なのである。

動物園に着いた二人はカンガルーの赤ん坊を見る。しかし、それは「新聞の写真で見たよりずっと大きくなっていて」、「もう赤ん坊というよりは小型の縮小版のカンガルー」であって、彼女はがっかりして「もう赤ん坊じゃないみたい」と言う。僕は「まだ赤ん坊みたいなもんだよ」と言って「彼女を慰め」るが、彼女はさらに「私たち、もっと早く来るべきだったのよ」と嘆く。その言葉は、彼女の願望が、「お母さんの袋に入ってる」赤ん坊カンガルーを見ることであったことを示している。それに対して僕は次のように反応する。

僕は彼女の腰に手をまわして、軽くとんとんと叩く。彼女は首を振る。僕は何とか彼女を慰めたいと思う。カンガルーの赤ん坊が思ったより成長してしまったことについて。でもどのように慰めたところで、それはもうとにかく成長してしまったのだ。だから僕は何も言わない。いくら親切心があっても、大きくなってしまったものはもう元には戻せない。流れてしまった時間も元には戻せない。それは僕の手にはあまることだ。

ここでも僕を突き動かしているのは、「何とか彼女を慰めたい」という思いなのだが、その一方で、僕は「もうとにかく成長してしまった」ものは、「いくら親切心があっても、…もう元には戻せない。流れてしまった時間も元には戻せない。それは僕の手にはあまることだ」と考える。「だから僕は何も言わない」で、「彼女の腰に手をまわして、軽くとんとんと叩く」。僕は、自分にできる事とできない事を明確に区別し、彼女を慰めるためにできるだけのことをしようと努力するのだが、自分にできないことでは悩んだり悔んだりしない。男性が同居する異性を慰めようと「彼女の腰に手をまわして、軽くとんとんと叩」く状況においては、自分の気遣いを「愛」と言っても良いところだろうが、僕はそれを「親切心」と言う。「親切心」とは人と人との間に一般的に生じる気遣いであり、閉じられた二人だけの関係において成立する「愛」とは区別される。僕がここで、自分の気遣いをわざわざ「親切心」と呼ぶのは、自分の彼女への振舞いを人としての一般的心遣いとして受け止めているからであろう。しかし、「愛」と言ってもよい状況で「親切心」という言葉が用いられていることは、その言葉には「愛」と言ってもよいだけの重みが託されていると考えてもよいのではないだろうか。**（注3）**

彼女は、電車の中ではカンガルー母子の心身の状態について真剣に心配し、元気な子供カンガルーを見ると今度は、「お母さんの袋に入ってる」小さな赤ん坊カンガルーを見たいという願望に執着する。彼女の心配や執着（願望）は奇妙なまでに執拗なのだが、僕はその原因を知ろうとするのでなく、むしろ僕は、どこまでも彼女の思いを受容し、彼女に寄り添い、慰めようとする。そして、そのような自分の振舞いについて、僕自らは「親切心」からのものとする。このような考え方と振舞い方について、我々はどう理解すべきであろうか。

## 3、大人カンガルー達についての二人の会話
## ――僕と彼女のカンガルー「理解」――

カンガルーの赤ん坊を見た後、二人の関心は三匹の大人カンガルーに向けられていく。関心の主たる内容は三匹の家族内での位置役割を判断することである。まずすぐにわかったのは父親カンガルーであった。「いちばん巨大で、いちばん物静かなのが父親カンガルーだ」

---

3「いくら親切心があっても」というフレーズは、最新版『はじめての文学』版（2006.12）における加筆である。

からである。僕の目からは「彼は才能が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじっと眺めている」ように見える。わからないのは二匹の雌カンガルーの区別である。

> 残りの二匹は雌だが、どちらも同じような体つきで、同じような体色で、同じような顔つきである。どちらがその赤ん坊カンガルーの母親だとしてもおかしくはない。
> 「でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ」と僕は言った。
> 「うん」
> 「とすると、母親じゃない方のカンガルーはいったいどういう関係でここにいるんだろう？」
> わからない、と彼女は言った。気のいい叔母さんかもしれないわね、と彼女はつけ加える。気のいい叔母さんか、と僕は思う。
> そんなことにはおかまいなくカンガルーの赤ん坊は地面を走りまわり、ところどころに意味もなく前足で穴を掘りつづけていた。彼／彼女は退屈を知らぬ生きものであるようだった。父親の周囲をぐるぐるとまわり、緑の草を少しだけ齧り、地面を掘り、二匹の雌カンガルーにちょっかいを出し、地面にごろりと横になり、そしてまた起き上がって走りはじめた。

僕は、母親カンガルーと「母親じゃない方のカンガルー」を区別しようとして、彼女に「いったいどういう関係でここにいるんだろう？」と尋ねてみる。それに対して、彼女は「わからない」と答えつつ、「気のいい叔母さんかもしれないわね」という言葉を「つけ加える」。僕が二匹の雌カンガルーの区別に関心を示すのに対し、彼女の関心はそこには向けられていないし、父親カンガルーにも関心を示さない**(注4)**。むしろ、彼女の疑問は、「なぜカンガルーはあんなに速く跳んで走るのかしら？」という点に向けられており、僕が「敵から逃げるためさ」と答えたのをきっかけに、二人の話題はカンガルーの「敵」に向けられて行く。彼女は僕に対して、「なぜカンガルーの赤ん坊はお母さんのおなかの袋に入るの？」、「保護されているのね？」、「どれくらいの期間保護されるの？」、「じゃあ、あの子はまだ一ヵ月だから…お母さんの袋の中に入るわけね」、「ねえ、あの袋の中に入るって素敵だと思わない？」と、僕に対して執拗に質問し続ける。それらは、彼女の関心が一貫してカンガルーの赤ん坊に降りかかる脅威への心配と、その裏返しとして母親に「保護される」ことに向けられてい

---

4 例えば、中野和典氏は、「『彼女』が動物園で最初に目にしたカンガルー達の姿は育児に無関心な父親や家庭の平穏をおびやかす夫の愛人として擬人化しうる」と述べる。（「逆説の母子像――村上春樹『カンガルー日和』論」（「福岡大学日本語日本文学」第 21 号　2012 年 1 月）また、増田正子氏は、ミステリアスな雌カンガルーの存在について、「『愛人』の擬人化でなく、『母親』とは異なる生き方を求める女性象、例えば仕事等の分野でキャリアップを図る姿の隠喩的形象」と解釈する。（「『カンガルー日和』（村上春樹）試論――カンガルーと「僕」と「彼女」の隠喩的形象について」「文学・芸術・文化　近畿大学文芸学部論集」第 25 巻 2 号　2014 年 3 月）だが、二匹の雌カンガルーの区別に関心を持っているのは僕のほうであり、彼女は雌カンガルーにそのような関心を示していない。そのことからすれば、それらの論者の示す解釈は、作中の彼女の表象に対するものではなく、むしろ、読者（論者）の関心を投影した解釈であるように思われる。本作品に登場するカンガルーの意味を読み取ろうとする際、それが誰によって捉えられた意味であるかは非常に重要であると考える。

ることを示している。

動物園に向かう電車の中の会話から、彼女は既にカンガルーの母子を擬人化し、深く感情移入して、その心身の健康を「真剣に心配して」いた。また、動物園でカンガルーの母子を目にした彼女は、母親カンガルーの袋で保護された赤ん坊の安全に強い関心を示し、それを見ることを願望し続けている。彼女の意識の奥に何があるかは具体的に分からないが、彼女が赤ん坊と母親の健康と安全について深刻な不安を抱えていることは確かであろう**(注5)**。そのことを感じ取った僕は、カンガルーとオーストラリアに関する自分の知識を総動員して、彼女を安心させる方向に会話を運ぼうとする。カンガルーの赤ん坊が母親の袋に入るのは「一緒に逃げるためさ。子供はそんなに速く走れないから」と説明し、「保護されているのね？」という彼女の念押しに対しては、「うん」「子供はみんな保護されているんだ。自然はとても厳しいからね」と答える。これらはすべて彼女の不安を敏感に感じた僕が、彼女を「慰めよう」とする対応であろう。

ここで、彼女に「ねえ、あの袋の中に入るって素敵だと思わない？」と言われ、「そうだね」と答えた後、僕は内心次のように思う。

> でも本当はそんなに素敵ではないかもしれない。ただごわごわしていて、生ぐさいだけかもしれない。でも僕はそんなことは口にしない。なるべく良いことだけを口にしようと思う。明るい側面だけを見ようと思う。だって今日はカンガルー日和なんだから。**(注6)**

僕のカンガルーの赤ん坊への擬人化と感情移入は彼女より現実的で、カンガルーの安全に対する不安も、僕は彼女ほど強くない。カンガルーに対する彼女と僕の温度差は明らかなのだが、それにもかかわらず、「僕はそんなことは口にしない。なるべく良いことだけを口にしようと思う。明るい側面だけを見ようと思う。だって今日はカンガルー日和なんだから」と内心思うのである。ここに「カンガルー日和」という言葉が再び出てくることに注目したい。彼女はカンガルーに深く感情移入してその健康を気遣い、赤ん坊の無事を心から願っている。それは一言で言えば、カンガルーの赤ん坊を祝福しようとする態度といえる。それに対して、僕はどこまでも彼女の願望に寄り添い、慰め、安心させようとするのであるから、それもまた僕から彼女への祝福といってよい。もとより、このような僕の態度を、単なる気休めや表面的なリップサービス、より厳しく言えば彼女への迎合と受け止める見方もあろ

---

5 中野和典氏は、彼女の「不安」の内容を、「〈若い夫婦〉の妻が抱える出産への不安」と解釈し、「胎内回帰願望は『彼女』の抱える子供を産むことへの不安を最も端的に表したもの」であると論じる。そしてまた、「それに性差別的な思考で向き合ってしまう夫」である僕は、「どれほど献身的に振舞っても『彼女』の不安の全てを払拭することはできない」と述べる。論者は、妻の不安の内実に目を向けた点に中野氏論の意義があると考える。特に、彼女の不安が、妻としてこれから迎える妊娠と出産への不安であるという指摘には共感させられる。しかし、他方において、彼女に対する僕の対応を、「性差別的な思考で向き合って」いるという指摘に対しては、全面的には同意できない。

6このフレーズは、最新版『はじめての文学』版（2006.12）における加筆である。

う。しかし見逃せないのは、ここで僕が「だって今日はカンガルー日和なんだから」と言っていることである。僕と彼女が、「カンガルーの赤ん坊」を見るのに「ふさわしい」日に、それを「正しいかたちで」見ること（「カンガルーの赤ん坊」に「祝福を与えてや」ること）を非常に重要視し、それを妨げるものとして「人生」の不都合さをとらえていることは先に見た。ここで僕が、「なるべく良いことだけを口にし」、「明るい側面だけを見」る態度を意識的に選択するのは決して一時的な気休めなどではないことは、それが「カンガルー日和」（不本意な「人生」の中にあって自分が正しいと思う振舞いができる日）であるということの中に示されているのではないだろうか。

その後、彼女のためにホットドッグとコーラを買いに行った僕は、売り場のラジカセから流れる歌を聞き、「ホットドッグが焼きあがるまでスティービー・ワンダーとビリー・ジョエルが歌を唄ってくれた」と感じる。一般的に言えば、スティービー・ワンダーもビリー・ジョエルも僕とはまったく無関係のはずであるが、僕はそれを聞いて自分への「贈与」と受け取ったのである。先に、僕の彼女への振舞いの奥には「親切心」が働いていることを見た。そのことを考え合わせれば、僕の中には、他者からの働きかけに「親切心」からの「贈与」を感じ取る感性が一貫して働いているように感じられる。僕自身はここで、「なるべく良いことだけを口にし」、「明るい側面だけを見」る態度を選択し、「だって今日はカンガルー日和なんだから」というのだが、それは、他者からの働きかけを「祝福」「贈与」と受け取り、自分自身も他者に対してそのように振る舞おうとする姿勢であろう。「カンガルー日和」とは、僕が志向するそういうありかたを表現する言葉なのではないだろうか。

僕と彼女は、最後に母親の袋の中に赤ん坊カンガルーが入った情景を目撃する。「彼女は満面の笑みを浮かべながら「ほら」と言って一匹の雌カンガルーを指さ」す。

> おなかの袋は大きくふくらんで、小さなとがった耳としっぽの先端だけがぴょこんと上にとび出していた。それは素敵な眺めだった。わざわざ見物に来たかいがあるというものだ。

これが「素敵な眺め」であり、「わざわざ見物に来たかいがある」といえるのは、母親に「しっかりと保護され」、「何も心配することはない」赤ん坊カンガルーの姿こそ、彼女が願った赤ん坊の安全を証するものであり、それによって彼女の不安が一時的にとはいえ払拭される「カンガルー日和」にふさわしい情景だったからである。さらにその時の母親カンガルーの泰然たる姿は、彼女に安心感を与える。

> 母親は強い日差しの中で汗ひとつかいてはいなかった。何か考え事でもしているみたいにそこでただじっと目を閉じていた。スーパー・マーケットで昼下がりの買物を済ませ、近くのコーヒー・ショップでちょっと一服しているといった感じだ。
>
> 「中に入っちゃえば、もう何も心配することはない」
>
> 「赤ん坊、寝ちゃったのかしら？」

「たぶんね。袋の中ではほかにやることもないから」

結末は、「カンガルー日和」にふさわしい情景で幕を閉じるのである。

## 5、人は他者とどう交通するか
## ――「理解」と「祝福」をめぐって――

「カンガルー日和」とは、自分の内面に不安を抱えた彼女と、その不安を和らげたいと願う僕が動物園に行き、念願だった母親の袋に入った赤ん坊カンガルーを見ることで、ひと時の安らぎを得る物語であるが、ここで見落とせないのは、彼女自身が自分の不安の内実について自覚的認識を持たないことであり、僕もまたそれを理解していないことである。二人はそれぞれ自分の視野から相手に働きかけ、時には会話がかみ合わないことがあっても、僕は辛抱強く彼女に寄り添い、良好な関係を築こうとする。作品の結末において二人にひとときの安らぎが訪れるが、決して二人が自分自身のありように目覚めたわけではない(注7)し、相互理解に到達したわけでもない。彼も彼女も、ストーリー全体を通して変わらないのである。

では、「カンガルー日和」の意義はどこにあるのか。私見によれば、それは、人がいかにして外部世界と接触し、交通するのかを、動物園の柵の中のカンガルーという「見られる他者」を媒介するという実験的方法で描き出した点である。人が外部を見、接触する時、そこにはその人の無意識領域が否応なく投影されざるを得ない。彼女の内面の深層にあるものが何かはわからないにせよ、彼女のカンガルー母子への強い関心と、その無事を願う気持ちの背後に何かがあることは疑えない(注8)。彼女のそういう姿に接する時、我々は、自分もまた無意識領域に何かを抱えていながら、実はそれが何であるのか知らないまま、それを外部に投影していることを実感させられないであろうか。そしてさらに、我々は、自己の無意識領域を投影した外部に接触することで、世界の像を形成し、そうやって形成した世界像が逆に自身の内部に影響を与えていく。まとめて言えば、我々が認識する外部とは、実は自分自身の内部の投影であり、その外部がまた内部を形成する。人間にとって、内部と外部は緊密

---

7 例えば、初出において、カンガルーの赤ん坊が母親の袋に入ることを指して彼女がいう「ドラえもんのポケットって胎内回帰願望なのかしら？」という台詞が、『村上春樹全作品』版で削除される。これは、彼女自身が自分の深い内面を意識化していたかのように受け取られる可能性を回避するための削除ではないかというのが、論者の考えである。

8 先行研究においては、むしろ、作品の表面に書かれていないものを具体的に示すことに関心が向けられているようである。例えば増田正子氏は、雄カンガルーはそれを見る僕自身の「戯画化」「隠喩」であるとして、「僕」という人物の中に「自己実現を目指す生き方〈作曲家・音符〉と生活〈餌箱〉との葛藤」があると指摘する。また、小林由紀氏は、彼と彼女は一ヶ月前に待ち望んでいた赤ん坊を失うという「ショック」を経験し、その「ショック」から立ち直るために「一ヶ月」を要したという解釈を示す。(「村上春樹『カンガルー日和』における『カンガルーの赤ん坊』の表象と『日和』の意味――ヘミングウェイ『白い象のような山並み』の受容から読み解く」「比較文化研究」No134　2018 年）しかし論者は、作品解釈とはそのような形で事実を確定することなのだろうかという疑問を禁じ得ない。

な相互的関係を結んでおり、そこでの「外部」とは実は真の意味における外部ではないのである。

「カンガルー日和」についていえば、カンガルーの柵の手前に立って、柵の中のカンガルーを見ている僕と彼女は、世界の前に立って世界を見、認識する人間の姿そのものである。そこでは、彼女も彼も、四匹のそれぞれ人間の家族内役割に置き換えて擬人化し、そこに自分自身の見方と願望を投影する形でカンガルーを把握する。そのような擬人化を回避して、四匹のカンガルーをカンガルーそのものとして見ることは誰にも不可能だからである。カンガルー自体は、人間が考え、想像し、認識する一切と全く次元の異なる世界に生きる存在であって、動物園の柵は、彼らの世界と人間の世界を隔てる乗り越え不能の境界である。それにもかかわらず、僕と彼女は、カンガルー達のメッセージと信じたものを受け取り、カンガルーを認識しえたと感じ、自己のうちにカンガルー像を形成していく。僕と彼女とカンガルーの関係が人間と世界の関係モデルであるという所以である。

一般的に言って、人が対象について知り、接近しようとすれば、人は誰かから教えられたり、自ら調べたりして、対象についての知識を得ようとする。彼女が母親カンガルーの生態について僕を質問責めにし、それに対して僕が「動物園に来る前に百科事典か動物図鑑でカンガルーについてのすべてをしっかり調べてくるべきだったのだ」と思うのは、その具体的一例である。そこで獲得される合理的知識は、一見個人の主観的志向を超えた客観的対象理解に道を開くように見えるが、そこで獲得された対象もまた、認識主体の意識を逃れているわけではないから、対象それ自体への到達を意味するわけではない。

それに対して、より日常的な対象認識の方法は、自身の生活体験をもとに既知のモノゴトを未知の対象の等価物として想定し、両者を類比的に捉えるやり方である。本来別のものを等価物として対置するのであるから、隠喩や象徴、擬人法という比喩的方法が用いられることになる。未知の対象の等価物を発見するためには、その人の生活体験や現実感覚をもとに主観的想像力を駆使することになる。彼女が、柵の中の謎の雌カンガルーを見て「気のいい叔母さんかもしれないわね」と言ったり、僕が父親カンガルーを見ながら、「才能が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱の中の緑の葉をじっと眺めている」と感じたりしたのはその具体例といえる。

人の対象理解の方法としてこれらは重要な意義を持っているし、それらは実際的には複合的に組み合わさって機能するであろうが、対象それ自体に到達する方法ではないということは否定できない。見物人が柵の中のカンガルーをどのように見たとしても、カンガルー自体に到達しえないということは、現実における人間の他者理解に置き換えたとき、より一層自明のこととなる。たとえば僕は、自身の主観を投影した形でしか彼女を理解し得ないし、それは、僕にとって彼女はどこまでも理解不能の他者であるということだからである。またそれは彼女の場合も同様であるし、そもそも人間は、自分自身の無意識層に何があるかは知りえないのである。以上のように見れば、「カンガルー日和」においては、彼女と僕がカンガルー達へ向ける認識のありようと、僕が彼女へ向ける認識のありようは相似形をなして

おり、そこでは、人間にとっての認識対象はどこまでも自分自身の意識の投影にしか過ぎないことが示されているのである。「カンガルー日和」が読者に衝撃をもたらすのは、動物園のカンガルーを見に行った若いカップルの中に、他者と向き合う読者自身の姿がくっきりと映し出され、自身の世界認識のありようが浮き彫りにされてしまうからである。

だが、そうであるとすれば、人が外部の対象と関係を結ぶ上で、そこにはどのような可能性が残されているのかが問題となろう。それは、「カンガルー日和」は人間の対象把握の不可能性を表現した小説なのかという問題でもある。我々は、この地点に立って、「カンガルー日和」の意味を探っていく必要があろう。ここで思い返すならば、そもそも二人は動物園へカンガルーを「理解」するために来たのではなく、「祝福」するために来たのであった。いうまでもなく、「理解」することと「祝福」することは、相手に対する態度として全く異質である。「理解」するとは相手を対象化することであり、それは必然的に生命をモノ化（物象化）する志向を含むのに対し、「祝福」するとは相手の生の保全と幸福を祈るという生命尊重の営みだからである。そのうえで、再び作品に戻るならば、カンガルーについて必ずしも深い知識を持たない彼女が、その生態について僕に執拗に質問したのは、正確なカンガルー理解に到達するためではなく、カンガルーの母子の安全と健康、幸福を祈ろう（「祝福する」）とする思いからであった。

また僕は彼女の執拗な質問に懸命に答えようとするが、僕のカンガルーへの知識も十分正確とは言えず、時として危うい答えを強いられる。しかし、僕はここで彼女に正しいカンガルー知識を与えるために答えているのではなく、僕の関心は、彼女に安心感を与えることに向けられている。僕が、「動物園に来る前に百科事典か動物図鑑でカンガルーについてのすべてしっかり調べてくるべきだったのだ。こうなることははじめからわかっていたのだから」と思うのは、自分の答えの不確かさが彼女の不安を亢進させることへの危惧からである。僕の関心も、目の前にいるカンガルーの存在と彼らの姿を通して、彼女への慰めと祝福をもたらすことにあった。つまり、「カンガルー日和」において、二人は祝福の姿勢で他者に向き合うことに重点を置いているのであり、それは他者を理解しよとする姿勢とはきわめて異質であるといえる。

我々はともすれば世界を「理解」し、「解釈」しようとするのだが、人間は遂に対象それ自体を認識することができない。人は、対象に自分の無意識を反映しつつ、「分かったつもり」で日常世界を生きるほかないからである。そこで他者を、「解釈」しようとするのでなく、「祝福」しようとする人間のありかたを、カンガルーと向き合うカップルの中に提示したのが「カンガルー日和」なのではないだろうか。